寄書

小供の正直

相模　平岩繁治

私の只今をります所から半里許り西南に當て南湖（茅ヶ崎）いいふ漁村に、茶屋町といふ町があり升（東海道に在り）其の町の某氏は飴菓子等賣りて日々の生活を立てゝ居り升、或る日上方風の旅人（男子）が休みまして菓子等喰べましたが其の時合惡其の家の母は用足に參りたくなりました故、丁度五才（昨年）になる男の子に汝は是にをるだよ母は少し用があるからと言ひて出て行きました、そこで此の子供は感心にも母の代りにと始終其の旅人に目をくばつてをりました處、旅人は其れとは知らず、母の大部暇の取れるを幸として、傍にありました卵子を三個程盗み喰ひて其の皮をばたもとに入れてそ知らぬ振をしてをりました、其の中母が出て參りましたので旅人はあわてゝ菓子の代丈拂つて出て行ふと致しました、そふすると其の子供は急に口を開きて「母さん卵子〳〵」と叫びました、母はひよつと氣がつきて卵子のある所を見しに二三個位少ひ樣に見へました故、其の旅人を呼び留めて尋ねましたのに旅人は何氣ない風で知らないと答へます其の子供又口を開きて喰はれた〳〵といひて今度は泣き出したもんですから旅人大に怒りたれ共遂に包むにつゝまれず、たもとの中より卵のからを出して再三誤りて後、三個の代價を拂ひて去つたといふことでした此の樣

に子供と雖も中々馬鹿にはならぬ者であり升、又自家を保護し或は父母の勞を助けるといふ事は此の幼き時分から發達して是非善惡は承知してをるのであり升から、父母兄姉等の導き樣如何に依りて善とも惡ともなる者であり升から充分此等の點には其の指導の任に當てをる者は吳々も注意せねばならぬ事であり升。

梅ちやんの日誌

三河　鈴木かなへ

妾の妹に今年四歳になる梅ちやんと云ふのがあります、妾が常に大事に遊ばせてやるもんですから御母さんの方は餘り慕ひませんで、却つて妾が少しても居ないと直ぐ泣き噪はきますけれど、妾も只今は村の高等小學校へ往かねばなりませんから、同じ樣に遊んで許り居る譯にはいきません毎朝學校の始まるまでは種々珍らしい業をして見せて喜ばせますそして最早學校が始まらんとする時に、梅子ちやん、姉さんは、今から學校へ行つて面白いお話を習つて來て話して上げるから大人しくして遊そんで居るんですよと謂ひますと梅ちやんはもー大層に悄れ顏をして御母さんの許へ往きますから、妾は直ぐ學校へ行きます、或日のこと妾の村に近藤先生と甲す御方がありますが此の御方は小學校の先生で妾の御父さんとは別して親しい間ですから度々御出でになつてお話など致されます、此の日は折り惡く御父さんが要用で他へ行かれた留守でしたから先生は雜誌や新聞を讀で御出でになつたが、退屈をなされましたと見え、妾と梅ちやんと遊んで居る椽側へ御出てになり